ISBN 978-4-903875-24-8
Contribution to the Studies of Eurasian Languages (*CSEL*) Series 21
ユーラシア諸言語の動態　III　－言語の多様性と類型と混成言語－
ユーラシア言語研究コンソーシアム 2019 年 12 月発行
Dynamics in Eurasian Languages III: ―*Diversity, Typology and Mixed language*―
Kobe City College of Nursing / Consortium for the Studies of Eurasian Languages
(December 31, 2019), pp. 133-150.

クトゥブ『ホスロウとシーリーン』第 5 章・第 6 章

The fifth and sixth chapters of Quṭb's *Khusraw u Shirin*

菅原　睦
SUGAHARA, Mutsumi
（東京外国語大学 Tokyo University of Foreign Studies）

クトゥブ『ホスロウとシーリーン』第 5 章・第 6 章

菅原　睦
MUTSUMI@tufs.ac.jp

キーワード：中期チュルク語　クトゥブ　『ホスロウとシーリーン』
ペルシア語　翻訳作品

0　はじめに

本稿は, クトゥブ Quṭb による中期チュルク語物語詩『ホスロウとシーリーン』*Xusraw u Šīrīn* (1341/2 年) から，先に菅原 (2018) で発表した部分に続く導入部第 5 章と第 6 章の転写テキストおよび日本語訳注を提出するものである. テキストに先立ち, 前稿で取り上げなかった先行研究から次のものをあげておきたい.

Құтб, «*Хұсрау - Шырын*». томды баспаға дайындаған: Ә. Керімұлы. Алматы: Таймас баспа үйі 2012.

作品全体のカザフ語訳，原写本のファクシミリなどからなる[1].

Котб, *Хосров и Ширин* (*Хөсрәү вә Ширин*)［書誌情報不明[2]］

作品全体のタタール語訳．上述のカザフ語訳がかなり直訳に近いのに対しこちらは韻文訳であり，より意訳的となっている.

Demirci, Ümit Özgür and Sibel Karslı, *Kutb'un Husrav u Şīrīn'i. Dizin*. İstanbul: Kesit Yayınları 2015.

語彙索引．筆者未見であるが Tokay (2017) で内容が紹介されている.

1　転写テキストおよび訳注

以下では，Zajączkowski (1958 II) 所収のファクシミリに基づき作品の第 5 章

---

[1] ここでは http://adebiportal.kz/kz/books/view/adebi_zhadigerler_16_tom_kutb_husraushirin__1470 で公開されている内容を参照した（2019.8.28 最終閲覧）．なお同書に収録されたファクシミリは明らかに Zajączkowski (1958 II) 所収のものの再録である.

[2] http://kitap.net.ru/kotb.php で公開されているものを利用した（2019.8.28 最終閲覧).

と第 6 章とにあたる第 123 対句から第 172 対句までの転写テキストおよび訳注を示す．使徒ムハンマドへの賛美である第 5 章については，ニザーミー Ilyās b. Yūsuf Niẓāmī によるペルシア語原作 (P)[3] 中の対応する箇所をあわせて示す．なお 4 人の教友を讃える内容の第 6 章は原作中に対応する部分をもたない．

[5]「使徒—平安あれ—の賛美」

Rasūl ‘alayh al-salām na‘tï　123-155 対句 = P140-171.

[6]「使徒—平安あれ—の 4 人の教友を讃えて」

Rasūl ‘alayh al-salāmnïŋ tört yārï ögdüsi　156-172 対句

アラビア語・ペルシア語起源の語については一般的な転写に従う．それ以外については，語頭以外のゼロ表記された母音を ( ) 付で，語頭のマッダ記号付アリフ (ï) を **a** で示す．またファー (ف) と上 3 点ファー (ڢ) はそれぞれ f と v に翻字して示す．

[4v/10]

Rasūl ‘alayh al-salām na‘tï

Muḥammad kim y(a)lav(a)č ärdi ḥaq-dïn	aŋa farmān-ladï **a**č teyü ḥaq dīn
y(a)ratïġï anïŋ tupraq-dïn ärdi	walē ne sözläsä čïn ḥaq-dïn erdi
125 anïŋ yüzi köŋ(ü)l-lärniŋ čirāġï	sözi dīn[4] rawnaqï ummat y(a)raġï
wafā maydānï-nïŋ čävük sawārï	nubūwat kārwānï-nïŋ salārï
‘imārat qïldï bu islām bāġïn[5]	kufra kufra-sï-nïŋ ol buzdï baġïn[6]
šifā‘at qïlġučï ummatlarïnġa	tümän miŋ āfarīn ol pāk jānïnġa
šarī‘at bōstānï-nïŋ[7] nasīmï	ḥaqīqat baḥrï-nïŋ durr-i[8] yatīmï
130 ol Ādam tupraqï-nïŋ kīmiyāsï	q(a)muġ ‘ālam közi-niŋ[9] tūtiyāsï
šarī‘at birlä bu ažun-nï tüzdi	xaṭālarnïŋ kökin ḥaq sözläp üzdi
anïŋ šar‘ï öŋin dīn-larnï ozdï[10]	šarī‘at-larnï mansūx qïldï buzdï

---

[3] 引用テキストは Barāt Zanjānī 校訂本の本文によるが，クトゥブによるチュルク語テキストとの対照上必要な場合には異本の形式を[　]内に示した．

[4] Z 24 sözi-din.

[5] Z 25 baγyn.

[6] H 188 bāġın.

[7] H 188 şefā‘at büstānınınn͡g.

[8] 語末の文字に母音記号ザンマ (u) が付されている．Z 25, H 188 dürr-ü.

[9] MS *kwzyny nynk*. Z 25 közini-niŋ.

[10] Z 25 özdi; H 189 üzdi.

juwānmard u raḥm[11] qïlġučï erdi tili dil quflï-nïŋ ačġučï ärdi
iδi nuṣrat qïlïčïn bermiš ärdi boyun sunmaġlï tan-dïn baš ketärdi
135 xajal qïldï kāfirnï mu‘jizātï köŋ(ü)l-lärni y(a)rut[t]ï äδgü **a**tï
Ayāz-i[12] xāṣ iδi xāṣdïn[13] öδürgän bu Maḥmūdluq tonïn k(ä)δgän k(ä)δürgän
čečäk teg dōstlar yüziŋä[14] ol šād sarw y(a)ŋlïġ bu ‘ālam ičrä āzād
[5r/11]
falak-kä sarwï bu kök ton k(ä)δürmiš ‘imāma yelkä ‘anbar yïδġï bermiš
qïlïp qulluq-nï[15] öz ixtiyārï bu beš nawbat-nï urdï tört yārï
140 anïŋ[16] na‘laynï boldï ‘arš üzä tāj amīn-i waḥy[17] bilgän sirr-i mi‘rāj
q(u)δuġ-dïn t(a)rt[t]ï ol küp-ni falak-kä bu tupraq tan-nï t(ä)ŋ qïldï malak-kä
Xalīl anïŋ č(ä)rigi xaylï-dïn[18] čïn Masīḥ bārgāhï-nïŋ[19] čāwuš-larïndïn[20]
bolup äm[g]äkdä rāḥat-ta evi ġār yïlan-lar yār örümčük parda tutar
berip öz tišini taš elgiŋä[21] ol qoδup ernin taš üzrä ačtï bu yol
145 erin tiš tašqa andïn ötrü berdi kim ol la‘l u gawhar[22] ornï taš erdi
q(a)čan taš birlä sïndï ärsä gawhar falak[23] tiš birlä t(a)rtïp keldi köp sar
uyur ärkän közi ḥaq birlä jānï tašï birlä iči toluġ ma‘ānī
üküš ‘āṣī-nï ot-dïn yulġučï[24] ol qiyāmat kün šifā‘at qïlġučï ol
özüm köp[25] qïldï ḥaq t(a)pġïnda taqṣīr ne tadbīr yā rasūl Allāh ne tadbīr
150 arïġ rawḍa-ŋdïn özüm qolġanï bu kim ošbu qulnï qol[26] sormazdïn ašnu

---

[11] Z 25 raḥim.

[12] 語頭の文字アリフに母音記号カスラ (i) が付されている．Z 25 Ajāz; H 189 ıyaz.

[13] Z 25 ḫāṣ dīn; H 189 ḫāṣ dîn.

[14] Z 25 jüzingä; H 189 yüzinge.

[15] H 189 ḳulluḳını.

[16] H 189 anun͡g.

[17] Z 25 ämīn vahij; H 189 emin-î vahyi.

[18] Z 25 ḫajli dīn.

[19] 写本では初頭の子音は文字 *p* で書かれている．Z 25 pārgāhi-niŋ.

[20] Z 25 ḉawuš-laryndyn; H 189 çāvūşlarındın.

[21] Z 26 elgingä.

[22] H 189 güher.

[23] H 189 irin.

[24] Z 26 jolγučy.

[25] köp は行の上に書き足されている．

[26] Z 26 quly qul.

älig kötrüp bu qul-nïŋ ḥaqïŋa bir[27]	du‘ā qïlsaŋ q(a)muġ q(a)δġusï tarïr
ilāhī Quṭb išin **ač** b(a)rča yandïn	teyü qol ketsü ġaflat jān u tandïn
bu köŋlin ganj-i[28] āsāyiš-qa qïlu ber	q(a)muġ ḥāl üzrä baxšāyiš qïlu ber
agar qul[29] yazuqï x^{w}ad bolsa taġča	anïŋ raḥmat t(ä)ŋizi yüz miŋ anča
155 tiläyür ol bahāna kim bahā yoq	aŋa miŋ yïlqï ṭā‘at δarra-ča yoq

[5]「使徒—平安あれ—の賛美」

123　神からの使徒であったムハンマド
　　神は彼に教えを開けと命じた

菅原 (2018: 431) で示したように，H は第 48 対句に誤って 45 という番号を付けたためこの 123 を 120 として示している．F II 671 (ḥaq の項) は後半の ḥaq を「真実の」と解し，この部分を「彼に真実の教えを開くことが命じられた」emu prikazano otkryvat’ istinnuju veru と訳している．

124　その成り立ちは土からであった
　　しかし何を語ろうと真に神からであった

後半の erdi の初頭の母音はカスラ記号 (i) 付きのアリフで表記されている．P140 Muḥammad k-āfarīniš hast xākaš hazārān āfarīn bar jān-i pākaš. 後半は「その浄い魂に幾千もの称賛を」を意味する．cf. 128.

125　その顔は心たちの灯火
　　その言葉は教えの光輝　共同体にとっての力

yaraġ「機会，可能性，準備」については Słownik 69, F I 483 および EDPT 962 *l*, OTWF 215 を参照．ummat yaraġï は F II 440 (ummat の項) で sila dlja posledovatelej「信奉者たちにとっての力」と訳されている．また『天国への道』*Nahj al-farādīs* からの Yā Muḥammed, **ümmetiŋ͡ yaraġı** yetmegey tün kün içinde ellig namāz qılmaqqa [NF 58.12-13] は「ムハンマドよ，お前の共同体は（毎）昼夜に 50 回の礼拝をするには力が及ばない」と訳せるだろう．čirāġ「灯火」は原文 P141 にも見られるが，この対句の内容は P141 を再現するものではない．

126　信義の戦場の機敏な騎手
　　預言者の隊列の隊長

čäwük「明敏な，機敏な」については Słownik 43 および F II 514 を参照．最後の語の綴り字はファクシミリからは判然としない．ここでは H 188 salārı および Z 25 salāry に従った．P142 sar u sarhang maydān-i wafā rā　sipah-sālār u sar-xayl anbiyā rā. 前半は「信義の戦場の総司令官」と訳せる．

---

[27] Z 26 qol-nyŋ ḥaqynga ber.

[28] Z 26 gänǰ; H 190 genç.

[29] Z 26 qol.

127　このイスラームの庭を築いた
　　不信仰の（？）枷を彼は破壊した

各半句末の語を H 188 は bāġın - bāġın; Z 25 は baγyn - baγyn と写しているが，押韻は異なる語によるという原則に従うならば，前半の語は bāġïn「庭を」，後半の語は baġïn「縛り（枷）を」と読むべきだろう[30]．後半の最初の 2 語は kufra のように母音記号が付されているが，この読みは韻律に合わず[31]，意味も判然としない．F I 647 (küfr の項) では後半部分が「彼は不信仰者たちの同盟を破壊した」on razrushil sojuz nevernyx と訳されている[32]．

128　その共同体のためにとりなしをする御方
　　その清い魂に千万の賛辞を

H 188 はこの対句を欠落させており，続く 129 に 125 という番号を付している．前半の内容は P143 の後半 šifāʻat-xʷāh-i kār-uftāda-i čand「いくたの哀れな者たちのとりなしを願う御方」に対応するが，後半は P140 の後半 hazārān āfarīn bar jān-i pākaš を訳したものである．なお P140 の前半は 124 の前半として訳されていた．

129　聖法の果樹園の薫風
　　真理の海の無比の真珠

durr「真珠」の語末の子音文字の上に母音記号ザンマ (u) が書かれているが，続く yatīm「孤児，無比の」との間にはエザーフェ -i が必要である．ただし同じ表記の例は 30r4 にも見られる．また並行する構成による durr-i maknūn「神秘の真珠」でも同様にエザーフェの位置に母音記号ザンマが付された例が 6r15, 9r21, 11v6 に見られる[33]．

130　彼はアーダムの土の霊薬
　　すべての世の眼の薬

写本の形式 *kwzyny nynk* は közini niŋ のように読める．おそらく közini「その眼を」と書いた後で köziniŋ「その眼の」と訂正したものであろう．P146 ba maʻnâ kīmiyā-yi xāk-i Ādam　ba ṣūrat tūtiyā-yi čašm-i ʻālam「意味においてはアダムの土の霊薬　姿においては世の眼の薬」．

131　聖法によりこの世界を整えた
　　誤りの根を真理を語って断った

132　彼の法は他の宗教を凌いだ
　　（他の）諸法を無効とし破棄した

---

[30] タタール語訳 багларын ул - бауларын ул はこの解釈によっている．

[31] H 188, fn. 24 は最初の語が「韻律上は küfr であるべきである」としている．

[32] 見出し語 küfr は「不信の ; 不信仰 ; 瀆神」nevernyj; bezbozhie; bogoxul'stvo と訳されているが，küfrä をどのような形式と考えたのかは明らかでない．

[33] Z 10 はこのような母音記号がエザーフェの母音が円唇母音であったことを示すとしている．

öŋin「他の」についてはF II 195, N 376およびEDPT 170 *r* (öŋi:) を参照[34]．前半の最後の語はN 323 (ozmaq の項), 376 (öngin の項) のようにozdï「凌いだ」と解すべきであろう[35]．前半の内容はP148a zi šar‘-i x^{w}ad šarī‘at rā nawī dād「自身の法により（それまでの）法に改新をもたらした」に，後半の内容はP149b šarī‘athā badō mansūx az ān ast「（それまでの）諸法はこうしてそれにより取り消された」にそれぞれ対応する．

133　寛大にして慈悲を行なう御方であった
　　その舌は心の錠の鍵であった

juwānmard「寛大な」の第1音節の母音は，同じ語が11v17で語頭の文字に母音記号ザンマ (u) を伴って表記されていることによった[36]. raḥmは韻律に合わないため，Z 25 raḥim (あるいはraḥïm) のような挿入母音を伴う形で読まれた可能性が高い[37]．P150 jawānmardē raḥīm u tund čūn šēr　zabānash gah kalēd u gāh šamšēr「寛大で慈悲深く獅子のように激しい　その舌は時に鍵，時に剣」.

134　主は勝利の刀を（彼に）授けていた
　　服従しない（者の）身体から頭を取り去った

P152a Xudāyaš tēġ-i nuṣrat dāda dar čang. 後半の内容は一致しない.

135　その奇蹟は不信心者を恥じ入らせた
　　その善い名は心を照らした

P153 ba mu‘jiz bad-gumānān rā xajal kard　jahānī sang-dil rā narm-dil kard. 後半は「心頑なな世の人を心優しくした」と訳せるだろう.

136　主が特別な者から選び出した特別なアヤーズ
　　この栄誉の衣装を（自ら）着　着せた（者）

Ayāz の最初の文字アリフには母音記号カスラ (i) が付されており，H はこれに従って ıyaz と写している．続く xāṣ は Ayāz を修飾する形容詞であるため F II 493 (xáṣ の項) での引用に見られるようにエザーフェ-iを補う必要がある[38]. öδürgän の前の *dyn* は, ペルシア語原文中の az xāṣān guzīda「特別な者たちから選ばれた」との対応から判断するならば dīn「宗教」ではなく[39]奪格接尾辞 -dïn と読むべき

---

[34] H 80 では öŋin を時の副詞のひとつとしている.

[35] cf. F II 530 (šar‘の項) öŋin dīnlärni üzdi「他の教えを破壊した」razrushili drugie very.

[36] 同様の表記は NF 91.12, 272.4 にも見られる．またウズベク語 juvonmard を参照.

[37] アラビア文字で綴られた raḥm の子音文字 *ḥ* に母音記号カスラ (i) が付された例が NF 405.12 に，また同じ語がウイグル文字で *r'xym* と表記された例が TA 77r5 に見られる．挿入母音については菅原 (2007: 30) を参照.

[38] 韻律上もこのエザーフェを長母音化した ayāzī（短長長）が正しい.

[39] cf. Słownik 121 (ödür-の項)「（真の）信仰（宗教）を」(prawdziwą) wiarę (religię); F II 493 (xáṣ の項)「真の信仰を」nastojashchuju veru; カザフ語訳 (p. 14)「えり抜きの宗教を」таңдаулы діні.

である．maḥmūdluq「栄誉」は原文中の maḥmūdī と同じく maqām maḥmūd「称えられた地位」(クルアーン 17:79) を指すと思われるが，同時に小姓アヤーズとの逸話で知られるガズナ朝の君主スルターン・マフムードの名を掛けている．käδgän, käδürgän は前半の öδürgän と同じく Ayāz-i xāṣ にかかる形動詞である．P151 Ayāzē [*var.* Ayāz-i] xāṣ u az xāṣān guzīda　zi mas‘ūdī ba maḥmūdī rasīda. 後半は「幸から栄誉へと到った」を意味する．

137　花のように友たちの顔に喜ばしい
　　糸杉のようにこの世において自由

P154 ču gul bar ābrō-yi dōstān šād　ču sarw az ābx^{w}ard-i ‘ālam āzād. 後半は「糸杉のように世の運命から自由」という意味である．

138　（その）糸杉は天空にこの緑色の服を着せた
　　（その）ターバンは風に龍涎香の香りを与えた

P155 falak rā dāda sarwaš sabz-pōšī　‘imāmaš bād rā ‘anbar-furōšī.

139　しもべの身を自らの選択とし
　　その 4 人の教友はこの 5 度の合図を打った

前半は韻律に合わない[40].「5 度の合図」は 1 日 5 回の礼拝への呼びかけの比喩である．P156 zada dar mawkib-i sulṭān-sawāraš　ba nawbat panj nawbat čār yāraš「王者に随行して　彼の 4 人の教友は順に 5 度の合図を打った」.

140　彼の履物は高御座の冠となった
　　啓示の守護者にして天界飛行の神秘を知る御方

P157 sarīr-i ‘arš rā na‘layn-i ō tāj　amīn-i waḥy u ṣāḥib sirr-i mi‘rāj. ペルシア語原文との比較は Zajączkowski (1956: 388) に見られる．

141　井戸から彼は壺を天へと引き上げた
　　この土の身体を天使と等しくした

この対句では土から造られた人間を低い存在から高めたことが述べられていると解釈した．küpni「壺を」に対して Z 25 köb-ni, H 189 köpni, F II 642 (quẕuġ の項) köpni はいずれも「多くを」と解したものと思われる[41]．カザフ語訳 (p. 14) көпті も同様であるが，タタール語訳は「我々を」безне としている．対応するペルシア語原文の内容とは部分的にしか一致しない．P158 zi čāhē burda māhē rā [*var.* mahdē rā] ba anjum　zi xākē karda dēwē rā ba mardum「井戸から月を［異文：ゆりかごを］星々へと引き上げ　土から悪魔を人間となし」.

142　ハリールは真に彼の軍団のひとり
　　マスィーフは彼の王宮の伝令のひとり

---

[40] qulluqnï (*qwllwq ny*)「しもべの身を」に対する H 189 の読み ḳulluḳını「そのしもべの身を」は韻律に適合する．

[41] F II 642 ではそのように訳されている：vytjanul iz kolodtsja on mnogix.

ここで čärigi xaylï と読んだ部分は F II 480 (xayl の項) では「軍勢の滞留地」stanovishche vojska と訳されている．「伝令」と訳した čāwuš は古代チュルク語 čawuš (cf. TMEN III 35; EDPT 399 *l*) の残存形とも考えられるが，ここではペルシア語原文中の語形がそのまま用いられたものとみなしたい．ハリールは預言者イブラーヒームを，マスィーフは預言者イーサーを指す．クルアーン 61:6 によれば，イーサーは自らをムハンマドの伝達者と称したとされる．P159 Xalīl az xayl-tāšān-i sipāhaš　Masīḥ az čāwušān-i bār-gāhaš. ペルシア語原作との対照は Ganixanov (1994: 10) に見られる．

143　苦難にあっても安楽にあってもその住まいは洞窟
　　蛇が友であり蜘蛛が幕を張る

2 番目の語は ämgäk「苦労，苦難」に対するオグズ形式 ämäk (cf. Az. əmək; Tr. emek) の例と見ることもできるが，韻律上は長長にあたる ämgäk が正しく，また本テキストでは他に ämäk の例が見られないことから[42]，むしろ ämgäk の誤記である可能性が高い．「蜘蛛が幕を張る」は，ムハンマドがアブー・バクルとともに追っ手を逃れて隠れた洞窟の入り口に蜘蛛が巣を作ったことを指している．P160 ba ranj u rāḥataš dar kōh u ġārē　ḥaram mārē u maḥram sūsmārē「苦難にあっても安楽にあっても山や洞窟にあり　連れは一匹の蛇，親友は一匹のとかげ」．

144　彼は自らの歯を石の手に委ね
　　その唇を石の上に置き　この道を開いた

以下の内容はウフドの戦い (625 年) でムハンマドが石を投げつけられて前歯を折り唇を切ったことに関するものである．P161 gahē dandān ba dast-i sang dāda gahē lab bar lab-i [*var.* sar-i] sangē nihāda. 「この道を開いた」に相当する語句はペルシア語原文中に見られない．

145　唇と歯とを石に与えた理由は
　　そのルビーと真珠の場所が石であったから

韻律に適合するためには gawhar の代わりにヴァリアント形式 guhar であるべきである (H 189 は güher と写している)．P162 lab u dandānš az ān dar sang zad čang ki dārad la‘l u gawhar jāy dar sang.

146　石によって宝石が割れると
　　天は歯ゆえに（？）多くの頭を引いてきた

後半は意味がはっきりしない．カザフ語訳 (p. 14) Тағдыр тісін сындырғанның басын оның табалдырығына алып келді「天命は彼の歯を折った者の頭をその戸口にもたらした」はペルシア語原文によったものか．P163 sar-i dandān-kanaš rā zēr-i čanbar　falak dandān-kanān āwurda bar dar「天は（ムハンマドの）歯を折った者

---

[42] ämgäk の例は 22r9, 30r21, 40r15, 56v3 などに見られる．

の頭を輪につなぎ　責め苛んで[43]戸口へともたらした」.

147　その眼が眠っているときもその魂は神とともに
　　その外面も内面も意味に満ちていた

前半はペルシア語原文と同じくハディース「わたしの目は眠るが、心は眠らないのだ」(牧野 2001: 272) をふまえている．P164a baṣar dar x^{w}āb u dil dar istiqāmat「目は眠りにあっても心は直立し」．後半の内容は一致しない.

148　多くの反逆者を（地獄の）火から救い出す御方である
　　裁きの日に仲裁をなす御方である

各句末の ol は 3 人称のコピュラと考えられる.

149　私は自ら神への奉仕において多くの過ちをしました
　　どんな手だてが　アッラーの使徒よ　どんな手だてが

ペルシア語原文 P166 ba xidmat karda am bisyār taqṣīr　či tadbīr ay Nabī Allāh či tadbīr の内容をほぼそのまま再現しているが，「アッラーの使徒」Rasūl Allāh (rasūlullāh) が原文中の「アッラーの預言者」Nabī Allāh (nabīyullāh) に対応している点が注目される[44].

150　そなたの清い庭から私自身が願うことは
　　（神が）問い正す前にこのしもべのことを願えということ

後半の 4 つ目の語は Z 26 や N 205 (ašnu の項) のように qul「しもべ」[45]ではなくペルシア語原文中の x^{w}āhiš kunī に対応する qol「願え」と読むべきである．P167 kunam dar-x^{w}āstē z-ān rawḍa-i pāk　ki yak x^{w}āhiš kunī dar kār-i īn xāk.「(神が) 問い正す前に」に当たる部分はペルシア語原文中に見られない.

151　手を挙げてこのしもべのため
　　祈願して下さるならばすべての憂いを散らす

qaδġu(sïnï) tar-「愁い・悲しみを散らす」は 7v6, 16r17, 27v4, 55v3 などにも見られる．cf. Słownik 171 (tar-の項); F II 341 (tar-の項). 動詞 tar-のアオリスト形は DLT 524.7 によれば tarar (tārār) であるが，ここでは bir との押韻のためにヴァリアント形式 tarïr が用いられていると考えられる．P168a bar-ārī dast az ān burd-i yamānī「そなたはかのイエメン縞のマントから手を挙げる」．冒頭の bar-ārī dast「そなたは手を挙げる」のみが行頭の älig kötrüp に対応している.

---

[43] この解釈は dandān-kanān = dar ḥāl-i dandān kandan, bā šikanja u ‘aδāb という注 (ed. Zanjānī, p. 311) に基づくが，別のエディションの脚注 (ed. Dastgirdī, p. 12, fn. 3) は同じ語を dandān-kunān と読み ṣamīm-i qalb, ṭīb-i xāṭir「(天の) 衷心，誠意」と解している.

[44] ペルシア語エディションの校異にも前者の形は示されていない.

[45] N 205 では「しもべがこのしもべを問いただし始める前に」Prezhde chem nachnet doprashivat’ ėtogo raba rab と訳されている．一方 H 190 は当該の語を ḳol と読んでいるが，同じページの脚注 24 では ḳul の可能性も示唆されている.

152　神よクトゥブの業をすべての面で開きたまえ
　　と願ってください　心身から怠りが去るように

P169 k-ilāhī bar Niẓāmī kār bigšāy　zi nafs-i kāfiraš zunnār bigšāy. 原文ではもちろんニザーミーの名が言及されている．後半は「その不信仰の魂から（異教徒の）腰帯を解きたまえ」という意味である．

153　彼のこの心を安らぎの宝庫に導いて下さい（？）
　　すべての状態に対し憐れみをなしてください

前半は意味がはっきりせず，韻律・押韻上も問題がある．ここでは対応するペルシア語原文に即して解釈した．写本の形式は，ペルシア語原文の押韻語 āsāyiš「安らぎ」, baxšāyiš「憐れみ」をそのまま保ち，句末の動詞 āwur「もたらせ」をどちらも qïlu ber と訳したうえで，前半の前置詞 dar を与格接尾辞 -qa で訳して āsāyiš の後に置いた結果のように見える[46]. P170 dilaš dar maxzan-i āsāyiš āwur　bar ān baxšūdanī baxšāyiš āwur. 後半は「あの憐れむべき者に憐れみをもたらしてください」を意味する．

154　たとえしもべの罪が山ほどあっても
　　かれの慈悲の海はその百千倍

P171 agar chi jurm-i ō kōhē girān ast　turā daryā-yi raḥmat bēš az ān ast. 後半は「そなたの慈悲の海はそれ以上である」という意味である．

155　彼は口実をさがすが価値はない
　　彼の 1000 年の勤行は塵ほどでもない

Rasūl ‘alayh al-salām-nïŋ tört yārï ögdüsi

y(a)na bu rasūl-nïŋ s(ä)fär ešläri	qïlur ärdi-lär tutšï xayr išläri
[5v/12]	
bu tört eš bašï ol ‘Atīq (e)rdi bil	köni dādï ičrä y(a)rar ärdi qïl
ikinči ‘Umar erdi dīn b(a)šlaġan	kāfirlar b(a)šïnï k(ä)sip tašlaġan
bu šayṭān-i la‘īn körsä erdi anï	qarār qïlmaz ärdi tanïnda jānï
160 üčünč ‘Uθmān erdi (u)vutluġ aqï	uqušluġ bilig-lig **a**δï muttaqī
iδi y(a)rlïġï-nï terip qoδġan ol	bu islām dīnïŋa[47] ača berdi yol
bu törtinč ‘Alī ol äränlär bašï	q(a)muġ-dïn rasūlqa s(ä)vüglüg eši
ol erdi Ḥasan-qa Ḥusayn-qa ata	anïŋ madḥïŋa ïdtï[48] ḥaq hal atâ[49]

---

[46] 与格接尾辞-qa を誤記と見て削除すれば韻律と押韻に適合するが,「この心を安らぎの宝庫としてください」という意味になりペルシア語原文の内容とは合わない.

[47] Z 27 dīningä.

[48] Z 27 mädḥingä ajdty; H 190 medhinge ayttı.

[49] H 190 heletā.

kim ol s(ä)vdi (e)rsä bu törtägüni　　anïŋ üzrä tuġdï sa‘ādat küni
165 wagar s(ä)vmäz ersä bu tört-tä birin　　t(a)muġ ičrä bilsün bu y(a)tġu yerin
ilāhī s(ä)vär m(ä)n bularnï köni　　najāt ber t(a)muġdïn qiyāmat küni
bu törtägüdin öŋ mä[50] yārānlarï　　fidā qïldï-lar ḥaq-qa tan jānlarï
turur erdi-lär ol rasūl-qa b(a)qa　　ne aysa mubārak kalāmïn uqa
ne mä m(ä)ŋgi-lig[51] ummat-lar erdi olar[52]　　köŋ(ü)l s(ä)vsä anlarnï q(a)yda ölär[53]
170 olar-nïŋ q(a)tïġlanmïšï birlä ol　　yeti iqlīm ičrä könüldi bu yol
ilāhī jānïm ol q(a)muġïn s(ä)vär　　ḥarām qïl bu miskīn-kä nār u saqar
kim āmīn teyü munda t(ä)prätsä til　　ol erniŋ yolï-nï bular birlä qïl

[6]「使徒－平安あれ－の 4 人の教友を讃えて」

前述のようにこの部分はペルシア語原作中に対応する箇所が見られず, さらに他の部分と異なるムタカーリブの韻律で書かれている[54]．この部分がクトゥブの創作によるのか，あるいは別のペルシア語作品に基づくのかは明らかでない[55]．

156　さらにこの預言者の愛する教友たち　彼らはつねに善行をなしていた

tutšï「つねに」は古代チュルク語形式 (cf. EDPT 461 *r*; OTWF 343) と一致する．同じ形は 63r17 にも見られるが, これら 2 例以外では語末に円唇母音をもつ tutšu (44v9, 66v15, 67v6 など) の形をとる．

157　この 4 人の教友の筆頭はかのアティークであったと知れ
　　彼は正しい裁きにおいて毛を割くごとくであった

erdi の初頭母音はカスラ記号 (i) 付きの文字アリフで表記されている．qïl yar-「毛を割く」は厳密であることのたとえ．cf. qïl yar- ‘rassekat’ volosok; razbirat’ do tonkostej; pronikat’’ (Fazylov 2009: 175)．同じ表現は 7r16 や 9r3 にも見られる[56]．

158　第 2 は教えを導くウマルであった

---

[50] H 190 ne.

[51] H 190 mengilig.

[52] Z 27 ölär.

[53] Z 27, H 191 olar.

[54] 短長長／短長長／短長長／短長の 11 音節で半句が構成される．一方他の部分はハザジュの韻律によっており，短長長長／短長長長／短長長の 11 音節で半句が構成される．なおこの部分の韻律に関しては Köprülü (1945: 281), Eckmann (1964: 284), Hacıeminoğlu (1968: X), Flemming (1974: 41) で言及されている．

[55] Ganixanov (1994: 12)によると，O. Sharafiddinov (1978) Nizomiy va Qutb, In: *Tanlangan Asarlar*, Tashkent, p. 243 においてこの部分が筆写者ベルケ・ファキーフ Bärkä Faqīh の作であることが主張されているというが，同論文は参照できなかった．

[56] これらの点については Flemming (1974: 62) で指摘されている．

不信仰者らの首を切り落とす（者）

159　この呪われた悪魔が彼を見れば

体に命がとどまらなかったであろう

前半は韻律に合わない[57].

160　第 3 は慎み深く寛大なウスマーンであった

理解と知識を備え非常に（？）敬虔な

uvutluġ の初頭母音は文字アリフのみで書かれている．後半に見られる aδï を Eckmann (1959: 120) は aδïġ「正気の」(cf. EDPT 46 *l*) の語末子音-ġ が脱落した形とし[58], N 164 (aδ [AǮ]の項), 340 (uqušluġ の項) は「彼の名前」ego imja; imja kotorogo と解しているが，ともに受け入れがたい．ここでは ayï「非常に」(DTS 28 *l*; GrOT 345) が-y- > -δ-の過剰修正を受けたものと考えたい[59]．なおこの対句と，同じ韻律による『クタドゥグ・ビリグ』からの basa ‘uṯmān erdi uvutluġ silig / kişide öḍürmiş aḳı kiṅg elig [QB 55]「さらに慎み深く清らかなウスマーンであった　人々の選良，寛大で広い手をもつ」との間の類似が注目される．

161　主の啓示を集めて保管した人である

このイスラームの教えに道を開いた

yarlïġ は「命令」と解釈することもできるが，Ata (2004: 758) や菅原 (2007: 50) に用例があげられている「啓示」の意味の方がここではより適切である．ača berdi の ber-「与える」は授与の補助動詞として用いられている[60]．一方 terip qoδġan の qoδ-「置く」は，なんらかの動作様態を表わす補助動詞の例とは考えにくい．

162　この第 4 は人士たちの頭アリーである

誰よりも使徒に愛された教友

形容詞 sävüglüg「愛される」に与格名詞句 rasūlqa「使徒に」が先行することについては, 並行する古代チュルク語の例 kuvrag-ka säviglig「衆に愛される」(OTWF 347) を参照.

163　彼はハサンとフサインの父であった

彼を讃えて神は「ハル・アター」を遣わした

---

[57] H 190 の表記 körse‿irdi が示唆するような連続する母音の融合を想定するならば，音節数を韻律に合わせることができる．

[58] aδïġ のこの言語での反映形は派生語 ayïġlïq (38v5, 63r10)「正気」に見られる．またのちに y に変化した δ を保ち，かつ語末の-ġ を脱落させている語の例はこのテキストに見られない．H 25 は ḳuḏuġ (quδuġ) ～ ḳuḏu (quδu) の例をあげているが，後者は quδï「下に」(cf. GrOT 334 (kudï)) のヴァリアントであって前者 quδuġ「井戸」とは別の語である．

[59] この文献中での過剰修正による-y- > -δ-の例には aδaq (15v9)「杯」(古代チュルク語 ayaq), käδik (18r14, 71v9)「獣」(同 käyik) がある．

[60] 補助動詞 ber-については H 174, Eckmann (1966: 143), Bodrogligeti (2001: 284) を参照.

後半の *'ydty* はもちろん ïd-「遣わす」の過去形 ïdtï であって，Z 27 ajdty; H 190 ayttı; N 403 (ayïdmaq の項) ayïdtï はいずれも誤りである．アラビア語 hal atâ「来たではないか」は，ここではこの語句で始まるクルアーン第 76 章（人間章）を指している. 当該章の内容がアリーとその家族に下されたとされる見解を踏まえている点で注目される[61].

164　誰でもこの 4 人を愛したならば
　　その者の上に幸いの日が昇った

ersä の初頭母音はカスラ記号 (i) 付きの文字アリフで表記されている．

165　またもしこの 4 人のひとりを愛さないならば
　　（その者の）横たわる場所は地獄の中であると知れ

166　神よ私はこの方たちを真に愛します
　　裁きの日に地獄からの救いを下さい

167　この 4 人以外の友たちもまた
　　その心身を神に捧げた

通常「前」を意味する öŋ が奪格名詞に後続して「～以外に」を意味する例はこの文献中にいくつか見られる：anï bir täŋridin **öŋ** kimsä bilmäz (106v8)「それを唯一の神以外に誰も知らない」= **juz** īzad kas namēdānad ki čūn ast (P5476)「どのようであるのかを神以外に誰も知らない」[62]．このような öŋ は意味上は古代チュルク語の öŋi 'other than (something *Abl.*), different' (EDPT 170 *r*; GrOT 225) に対応している．なおこの文献には öŋi の例は見られないが，上記 132 では öŋin が「他の」を意味する形容詞として用いられていた．

168　彼らは使徒に目を向けていた
　　何を言おうとその祝福された言葉を理解していた

tur-は baq-「目を向ける」と uq-「理解する」とに持続の意味を加える補助動詞として用いられていると考えられる[63].

169　彼らはなんと喜ばしい共同体であったか
　　心が彼らを愛すればどこで死ぬだろうか

mäŋgilig (*mnkky lyk*) は Słownik や F に項目としてあげられていない．カザフ語訳 (p. 15) は мәңгілік「永遠の」としているが，「永遠（の）」はこの文献では第

---

[61] 同じ内容の言及は『ハーフィズ・フゥーラズミー詩集』(Toparlı 1998: 70, 73) およびナヴァーイーによる『宝石の一聯』*Naẓm al-jawāhir* の序文中 (Türk 2017: 71) にも見いだされる．

[62] öŋ のその他の例は Słownik 123; F II 194; N 372; H 115-116 を参照.

[63] 補助動詞 tur-については H 175, Eckmann (1966: 144), Bodrogligeti (2001: 286)を参照．F I 564 (kalām の項) はこの例を動詞 stojat'「立っている」を使って stojali, gljadja na proroka, (slushali), chto on govoril, (i) vnikali v ego mudrye slova と訳している．

2 音節に円唇母音を持つ mängü (*mnkw* 22r7, 43r21, 48v1 など) の形で見られる[64]. mäŋgilig は QB1789, 1881, 1975 などに見られる men͡gilig (= mäŋilig) ‘joyful, happy’ (EDPT 770 *l*) のヴァリアントと考えられる[65]．各半句末の語を H 191 は olar - olar としているが[66]，押韻は異なる語によるのが原則である．Z 27 は ölär - olar としているが意味は示していない．ここでは olar「彼ら」- ölär「死ぬ」(アオリスト 3 人称[67]) と考えたい．なお前半の句は韻律に合わない．

170　彼らが尽力したことによって
　　7 つの気候帯の内にこの（教えの）道が正された
171　神よ　私の魂は彼らすべてを愛します
　　この哀れな者に対し獄火・猛火を禁じてください
172　誰かここで「アーメン」と舌を動かすならば
　　その者の道をこの方たちと共にしてください

2　結びに代えて

以上の検討により示されたように, クトゥブ作品の第 5 章はニザーミーによるペルシア語原作と内容・行順ともにかなりよく対応している．一方の第 6 章は同じ原作に基づくものではないが, 言語や文体の面で第 5 章と異なる特徴は見受けられなかった．今後さらに，導入部の残りの 3 章および第 10 章以下の物語本体部分を同様にペルシア語原作と対照して詳しく分析することにより，14 世紀中期チュルク語を代表するこの作品についての理解が一層進むであろう．

---

[64] 他の中期チュルク語文献での形式は EDPT 351 *l* (beŋgü:の項), 菅原 (2007: 43) を参照.

[65] これと並行する母音間での-ŋ- > -ŋg-の変化を示す例に köŋgül *kwnkkwl* (89v13)「心」がある.

[66] cf. 後半部のカザフ語訳 (p. 15)「心が彼らを愛すれば（今）彼らはどこに」Көңіл сүйсе оларды (енді) қайда олар?; 同タタール語訳「どこで現在そのような者を見ることか」кайда хәзер шундыйны күрмәк!からは，いずれも句末の語を olar「彼ら」と読んだことがわかる.

[67] öl-「死ぬ」のアオリスト形は, 古代チュルク語 ölür と異なりこの文献では常に ölär として 42r14, 58r18, 73v11 などに見られる.

略号一覧

DLT : Kâşgarlı Mahmud, *Dîvânü Lügati't-Türk, tıpkıbasım*. Ankara: Kültür Bakanlığı 1990.
DTS : Nadeljaev et al. 1969
EDPT : Clauson 1972.
F I/II : Fazylov 1966/1971.
GrOT : Erdal 2004.
H : Hacıeminoğlu 1968. (repr. 2000.)
N : Nadzhip 1979.
NF : *Nehcü'l-Feradis I, tıpkıbasım*. Ankara: Türk Dil Kurumu 1956. *Nechü'l-Ferādīs II, metin*. Ankara: Türk Dil Kurumu.
OTWF : Erdal 1991.
P : Niẓāmī Ganjawī, *Xusraw u Šīrīn*. ed. by Barāt Zanjānī. Tahrān: Mu'assasa-i Intišārāt-i Dānišgāh-i Tahrān 1390 (2nd ed.).
QB : Arat 1979.
Słownik : Zajączkowski 1958/1961 III.
TA : *Tezkereh-i evliâ, manuscrit ouïgour de la Bibliothèque Nationale, reproduit par l'héliogravure typographique*. Paris: Imprimerie Nationale 1890.
TMEN : Doerfer 1963.
Z : Zajączkowski 1958/1961 I.

参考文献

Arat, Reşid Rahmeti (1979) *Kutadgu Bilig I. metin.* 2nd ed. Ankara: Türk Dil Kurumu.

Ata, Aysu (2002) *Harezm - Altın Ordu Türkçesi*. İstanbul.

Ata, Aysu (2004) *Türkçe İlk Kur'an Tercümesi (Rylands Nüshası) Karahanlı Türkçesi (Giriş-Metin-Notlar-Dizin)*. Ankara: Türk Dil Kurumu.

Bodrogligeti, András J. E. (2001) *A Grammar of Chagatay*. Muenchen: Lincom Europa.

Clauson, Sir Gerard (1972) *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish*. Oxford: Clarendon Press.

Doerfer, Gerard (1963) *Türkische und mongolische Elemente im Neupersischen I. Mongolische Elemente im Neupersischen*. Wiesbaden: Franz Steiner.

Eckmann, János (1959) Das Chwarezmtürkische. In: J. Deny et al. (eds.) *Philologiae Turcicae Fundamenta I*, 113-137. Wiesbaden: Aquis Mattiacis apud Franciscum Steiner.

Eckmann, János (1964) Die kiptschakische Literatur. In: L. Bazin et al. (eds.) *Philologiae Turcicae Fundamenta II*, 275-304. Wiesbaden: Aquis Mattiacis apud Franciscum

Steiner.
Eckmann, János (1966) *Chagatay Manual*. Bloomington: Indiana University.
Eckmann, János (1971) *The Dīvān of Gadā'ī*. Bloomington: Indiana University.
Erdal, Marcel (1991) *Old Turkic Word Formation I/II*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
Erdal, Marcel (2004) *A Grammar of Old Turkic*. Leiden - Boston: Brill.
Fazylov, Ėrgash Ismailovich (1966, 1971) *Starouzbekskij Jazyk: Xorezmijskie Pamjatniki XIV Veka I/II*. Tashkent: Izdatel'stvo "Fan" Uzbekskoj SSR.
Fazylov, Ėrgash Ismailovich (2009) *Latafat-name («Kniga o krasote») Xodzhandi.* Vtoroe dopolnennoe i utochnennoe izdanie. Tashkent.
Flemming, Barbara (1974) *Faḫrīs Ḫusrev u Šīrīn: eine türkische Dichtung von 1367*. Wiesbaden: Franz Steiner.
Flemming, Barbara (2006) Old Anatolian Turkish poetry in its relationship to the Persian literary tradition. In: Lars Johanson and Christiane Bulut (eds.) *Turkic-Iranian Contact Areas*: *Historical and Linguistic Aspects*, 49-68. Wiesbaden: Harrassowitz.
Ganixanov, Mazitdin Abdulganievich (1994) Sravnitel'nyj analiz poem "Xusrav i Shirin" Nizami i Kutba. Avtoreferat dissertatsii. Tashkent: Tashkentskij Gosudarstvennyj Institut Vostokovedenija.
Hacıeminoğlu, M. Necmettin (1968) *Kutb'un Husrev ü Şirin'i ve Dil Hususiyetleri.* İstanbul: İstanbul Üniversitesi Edebiyat Fakültesi Türk Dili ve Edebiyatı Bölümü (repr. Ankara: Türk Dil Kurumu 2000).
Köprülü, M. Fuad (1945) Çagatay edebiyatı. In: *İslâm Ansiklopedisi III*, 270-323. İstanbul.
牧野信也（訳）(2001)『ハディース　イスラーム伝承集成Ⅱ』. 中公文庫.
Nadeljaev et al. (1969) *Drevnetjurksij Slovar'*. Leningrad: Izdatel'stvo «Nauka».
Nadzhip, Ėmir Nadzhipovich (1979) *Istoriko-sravnitel'nyj Slovar' Tjurkskix Jazykov XIV Veka: na Materiale «Xosrau i Shirin» Kutba*. Moscow: Glavnaja Redaktsija Vostochnoj Literatury.
Niẓāmī Ganjawī, *Xusraw u Šīrīn*. ed. by Waḥīd Dastgirdī. Tahrān: Kitābfurōšī-i Ibn Sīnā 1333.
Niẓāmī Ganjawī, *Xusraw u Šīrīn*. ed. by Barāt Zanjānī. Tahrān: Mu'assasa-i Intišārāt-i Dānišgāh-i Tahrān 1390 (2nd ed.).
Nizami Gjanzhevi, *Xosrov u Shirin*. ed. by Lev Aleksandrovich Xetagurov. Baku: Izdatel'stvo Akademii Nauk Azerbajdzhanskoj SSR 1960.
ニザーミー『ホスローとシーリーン』岡田恵美子（訳）平凡社東洋文庫 1977.
Nizami Gjanzhevi, *Sobranie Sochinenij v Trex Tomax*. sostavitel': R. M. Aliev. Baku: Azerneshr 1991.
Nizamî, *Hûsrev ve Şirin*. trans. by Sabri Sevsevil. İstanbul: Millî Eğitim Bakanlığı Yayınları 1994.

菅原睦 (2007)『ウイグル文字本「聖者伝」の研究 I. 序論と転写テキスト』神戸市看護大学.

菅原睦 (2018)「クトゥブ『ホスロウとシーリーン』導入部からーペルシア語原作との対照ー」In: Tooru HAYASI et al. (eds.) *Diversity and Dynamics of Eurasian Languages*, 421-447.

Tokay, Yaşar (2017) Kitap tanıtım ve değerlendirme. Kutb'un Husrav u Şîrîn'i Dizin. *International Journal of Language Academy* 5-1: 436-450.

Toparlı, Recep (1998) *Hârezmli Hâfız'ın Divanı. İnceleme - metin - tıpkıbasım*. Ankara: Türk Dil Kurumu.

Türk, Vahit (2017) *Ali Şir Nevâyî, Münacât, Çihil Hadîs (Kırk Hadis), Nazmü'l-Cevâhir, Kitâb-ı Sırâcü'l-Müslimîn (Metin-Aktarma-Dizin-Tıpkıbasım)*. Ankara: Türk Kültürünü Araştırma Enstitüsü.

Zajączkowski, Ananiasz (1956) Starejshaja tjurkskaja versija poemy Xosrev-u-Shirin Kutba. In: Felix Tauer, Věra Kubíčková, Ivan Hrbek (eds.) *Charisteria Orientalia praecipue ad Persiam pertinentia -- Ioanni Rypka*, 387-396. Praha: Nakladatelství Československé Akademie Věd.

Zajączkowski, Ananiasz (1958/1961) *Najstarsza Wersja Turecka Ḫusräv u Šīrīn Quṭba I-III.* Warszawa: Państwowe Wydawnictwo Naukowe.

The fifth and sixth chapters of Quṭb's *Khusraw u Shirin*

SUGAHARA Mutsumi
(Tokyo University of Foreign Studies)

This paper presents a new edition of the fifth and sixth chapters (containing 50 distichs in all) of Quṭb's *Khusraw u Shirin*, a Middle Turkic translation of Niẓāmī's Persian work under the same title, together with a Japanese translation and notes.

The two chapters treated here belong to the introductory part of the work. As shown in the present study, the fifth chapter reproduces rather faithfully the section of the original Persian text containing the eulogy for Prophet Muhammad. The sixth chapter, which is devoted to the praise of the first four Companions of the Prophet, has no counterpart in the Persian text of Niẓāmī. Whether it is an original composition by Quṭb or based on yet another Persian work remains unclear. It must be noted that no linguistic difference was observed between the two chapters.